ロバート・M・ラウナー「サミュエル・ベイリーと古典派価値論」

Robert M. Rauner, Samuel Bailey and the classical theory of value, London, 1961.

かってはわが国経済学界の表看板であった学史研究が最近低調であるのに反して、海外殊にイギリス、アメリカにおいては、古典派経済学特にリカード及びリカード派経済学の研究とその時期における反リカード的潮流の再評価とが、近年とみに盛んになってきている。(1) これは、大きく見るならば、極度に細分化し精緻化しその反面技術学的偏向をさえ生じかけている経済学が再び社会科学としての自己の体系を確立しようとする動きの一環と把えられようが、視野を学史に限ってその直接の理由を求めるなら、何よりもまずリカード全集の刊行、次にシュムペーターの遺稿「経済分析の歴史」の公刊及びロビンズ卿の諸研究をあげねばなるまい。(2) 全集はリカード及びその周辺の研究に計り知れぬ便宜を与え、シュムペーター及びロビンズ卿は反リカード的潮流の責極的再評価ならびに「顧みられざる経済学者達」—neglected economists—の再発掘に大きな刺戟を与えた。たとえば、ブローグのリカード派経済学研究は、リカード全集の検討と、リカード派が当時のイギリスにおいてすら少数派であったというシュムペーターの見解への批判的対決とを支柱としており、パグリンのマルサス及びローダーデール研究では、シュムペーターの「経済分析の歴史」、ロビンズ卿の「経済政策の理論」(3) を出発点として、反リカード的伝統の発掘・再評価が行われている。

(1) たとえば次の如きものがその例にあげられよう。
Meek, R. L., Studies in the labour theory of vlaue, London, 1956.
水田・宮本訳「労働価値論史研究」日本評論新社、昭和三十二年
Clair, O. S., Key to Ricardo, London, 1957.
Blaug, M., Ricardian Economics, A historical study, New Haven, 1958.
Robbins, L., Robert Torrens and the evolution of classical economics, London, 1958.

Shoup, C.S., Ricardo on taxation, New York, 1960.
Paglin, M., Malthus & Lauderdale, The Anti-Ricardian tradition, New York, 1961.

これらの研究のうち、リカードの労働価値論を肯定的に評価するのはミークの研究のみである。こうした、価値論以外の部分に焦点をおく研究と、マルサス的乃至は反リカード的潮流の責極的再評価とが結びつくと、従来リカードの忠実な弟子と見られていた経済学者のマルサス的側面が浮彫りにされる。リカード価値論の忠実な解説者と目されていたド・クインシーが後期に於ては全く反リカード的であったことを論証する Gherity, J. A., "Thomas De Quincey and Ricardian Orthodoxy", *Economica*, August, 1962. p. 269〜p. 274. などはその典型といえよう。更に、Gayer, A.D., Rostow, W.W., Schwartz, A.J., The growth and fluctuation of the British Economy 1790—1850, vol. I, II, Oxford, 1953. の如き実証的研究、資料の公刊も指摘せねばならない。Link, R. G., English theories of economic fluctuations 1815—1848, New York, 1959, は学史研究にそれが生かされた一例であり、貨幣賃金と穀物価格の比例関係がリカードの時代に存在したか否か—リカード賃金論の時論的当否—をめぐるブローグ＝グラムプ論争にもゲイヤーらの右の労作が大きな役割を演じている。cf. Blaug, M., op. cit., p.9〜10., Grampp, W. D., The Manchester School of Economics, Stanford 1960. p.31〜33.

(2)

(3) Robbins L., The theory of economic policy in English classical political economy, London, 1952.

ここに取上げたラウナーの著書も、パグリンと同じく、シュムペーター、ロビンズ卿の流れにそった学史研究の一典型である。本書は、ロビンズ卿の指導をうけた著者が一九五六年に学位請求論文としてロンドン大学に提出したものに基いて作成されている。

ベイリーは、セリグマンのいわゆる「顧みられざる経済学者達」の一人である。しかし、全然陽の目を見なかったわけではなく、主著「価値の性質・尺度・原因に関する批判的論究(4)」の刊行以来現在までに、四度び問題にされている。その第一は、刊行直後であった。彼の著書は、リカード、マルサスらの価値論の「錯雑と混乱」—リカードにおける不変の価値の探究、労働価値論、マルサスにおける名目価値と真実価値の区別、等—を、価値とは商品間の交換比率であり究極的には交換当事者の感情 mental affection, 評価 esteem

にほかならないとする徹底した相対価値論の立場から批判するものである。従って、当然大きな反響を呼ぶが、古典派経済学の厚い壁には抗すべくもなく、何らの社会的成功もかち得ずに終ったとされてきた。第二は、マルクスの剰余価値学説史第三巻における最初の発掘である。ここでは、価値論なき価格論が批判され、価値と価値形態の混同が指摘され、リカードの労賃・利潤相反関係に対するベイリーの批判が反批判される。第三は、セリグマンによる肯定的発掘(5)であって、ここではじめてベイリーは、主観価値論の先駆、価値決定における時間要素の重視＝ボェーム・バヴェルクの先駆、地代概念の拡張＝マーシャル準地代の先駆、等々として高く評価される。学史上のベイリーの地位はこれでほぼ確定し、一九三一年にはロンドン大学のリプリント第七冊に「批判的論究」がおさめられるに至る。第四はシュムペーターの「経済分析の歴史」における再発掘である。彼はベイリーを「科学的経済学の歴史における第一級の地位(6)」に位置する者と評価して、忘れられかけているセリグマンの業績を再びわれわれに思いおこさせた。

かようにベイリー研究史を整理するならば、ベイリー研究の残された問題が、第一に、彼の同時代への影響を探ることであり、第二に、セリグマン、シュムペーターらの研究の再検討であることはおのずから明らかとなろう。ラウナーの研究の意義は、主として、この第一の点を詳細に解明したところにある。

(4) A critical dissertation on the nature, measures, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the author of essays on the formation and publication of opinions, & c. & c., London, MDCCCXXV.

(5) 「リカード価値論の批判」 鈴木鴻一郎訳、日本評論社、昭和二十五年
Seligman, E.R.A., On Some Neglected British Economists, in Essays in Economics, New York, 1925.（最初の発表は *Economic Journal*, XIII, 1903.）
平瀬已之吉訳「忘れられた経済学者たち」未来社、昭和三十年

(6) Schumpeter, J.A., History of Economic Analysis, London, 1954. p. 486.
東畑精一訳「経済分析の歴史」岩波書店、昭和三十年～三十七年、一〇二六頁、（第三分冊）、

本書の構成は次の如くなっている。

1. Preliminary Remarks
2. The Nature of Value

3. The Measures of Value
4. Bailey's Judgments Confirmed
5. The Causes of Value
6. Reactions
7. More Reactions

Appendices—I, Biographical summary, II, Author of the Westminster Review article on the Critical Dissertation—

ベイリーの主観価値学説史上の位置について、ラウナーは次の如く述べている。「価置を感情 mental affection とすることによって、ベイリーは正しい軌道にのり、それ故、後のいわゆる主観価値論者達の中の一人となった」(p.6)。また、イギリスにおける経済学の流れと、ベイリーの位置については、次の如く述べている。「大陸が効用理論の伝統をガリアニ、コンディアックからチュルゴー、J・B・セイを通じて築きあげてくる間、イングランドの大部分の思考は別の線をたどってきた。……(ジェヴォンズ、マーシャルより)何年も後になってはじめて、イングランド自身の地下の伝統が、ローダーデール、シーニョア、ホエイトリー、ロングフィールド、ロイド及びバンフィールドの著作の研究で脚光を浴びるようになった。おそらく、ローダーデールを除いて、ベイリーは、最初に舞台にあらわれて、潮流を非常な力で他の方向に向きかえさせようと努めた人々の中に伍している」(p.7)。本書は、ラウナーのかかる評価を、ベイリー自身の叙述と、反対者達の叙述とから立証せんとするものである。

第一章は二頁足らずの前書きであって、「批判的論考」出版の翌年にウェストミンスター評論にあらわれた酷評、一八四五年のマカロックの否定的批評、トレンズの評価などが指摘され、セリグマン、シュムペーターのベイリー研究への貢献が紹介されている。

第二、第三及び第五章では、表題から明らかなように、ベイリーの相対価値論が詳細に紹介されるが、多くの頁が費されているのは、ベイリー理論そのものの解説ではなく、リカード、マルサス、ド・クインシー、J・ミル、マカロックらの「真実」価値論に対する彼の批判の紹介である。何故なら、ベイリーの理論は、「公認の見解」に対する彼の反撥から引出されたものであり、この「公認の見解」は主としてリカード及びマルサスによって形成されたものであったからである(p.22)。しかし、ラウナーの先の見解にも示されていたように、ベイリーと意見を等しくする経済学者が当時いなかったわけではない。例えば、「われわれは二商品の比較なしには価値又は価値の変化を表現することが出来ない」というローダーデールの見解がベイリー価値論の先駆をなすものであることは、ベイリー自身の認めるところであり(p.6)、又、文明国においては「大部分の商品はそれに費される資本によって価値を決定される」となすトレンズの資本理論は、

ベイリーの価値原因論と基本的に一致する見解として、ベイリーの擁護するところとなっている（p. 69）。ラウナーは、又、セリグマン以来のベイリー研究の当否をも問題として取上げる。価値尺度論においては、「異時間の価値比較をベィリーは不可能ないし無益とした」とするカール・ボード、ウォルシュらの見解（p. 28, p. 37）が拒否され、かえって、指数問題の本質を正しく把えた初期の経済学者としてベイリーが評価される。価値原因論においては、ベイリーを資本節欲説の先駆とするボーレイ、セリグマン、エッジワースらの評価が全面的に肯定され（p. 72）、この立場から、J・ミル、殊に、マカロックの無際限な労働価値論拡張に対するベイリーの批判が評価される。

第四章が、尺度論紹介と原因論紹介の間に挿入されているのは、一見奇異に感じられるが、これは、ラウナー自身の説明によれば、ベイリーが、未だリカードの「マルサスへの評注」及び価値論に関する手紙類、殊にトラワーあての手紙、マルサスの王立文学協会での二報告—これらには両者の絶対価値に関する見解の一致が示されている—等を利用し得なかったにも拘らず、如何に正しくその価値論の欠陥を批判し得ていたかを、これらの資料に基いて確認するためである。

第六章では、ウェストミンスター評論誌上の匿名批評（付録Ⅱでラウナーは、この筆者をJ・ミルと推定しその論拠を提示している）、マカロック、J・ミルらのベイリーに対する反批判と、利潤、賃金論におけるベイリーへの部分的譲歩が紹介され、第七章では、マルサス及びリードのベイリー批判（リードの価値論がベイリーに負っているとなすセリグマン、シュムペーターの見解をラウナーは否定し、リードの立場は、むしろ、マルクスのそれと類似していると主張する—p. 127～9—）、コッタリルのベイリー評価、J・S・ミルのベイリーへの賛成、マクレオードのベイリー評価等が紹介されている。

なお、付録Ⅰのベイリー年譜は、ベイリー研究史上はじめて作成されたもので、資料的価値の高いものである。

先に述べたベイリー研究史に照して、右のごとき内容の本書を見るとき、われわれは、本書が今後の研究に大きな素材を提供しており、古典経済学から主観価値学説への学史の歩みを探る上に貴重な手掛りを与えるものであると評価することができるであろう。

（上野　格）